

定例研究会

四月十二日(日)昼一時東京新宿洲鳳会館、主催日本琵琶楽協会。羅生門、藤内旭須美、接待、高田栄水、湖水渡、清川嵐舟、花の敦盛、木原綾子、木村重成、石坂鶴朋、都路、押川旭葉、講評吉川英司先生。(有料)

芸歴六十年記念琵琶演奏会

四月十八日(日)昼金沢市能楽文化会館、主催若宮旭登女史。会員の外東西の各流派名手数氏協賛出演。(次号詳報)

京都琵琶協会四月例会

四月十九日(日)昼本部平井会長宅(次号詳報)

日本琵琶楽協会関西支部総会

四月廿六日(日)昼京都市国鉄西大路駅前料亭みやこ(次号詳報)

京都琵琶協会春季演奏会

四月二十九日(日)昼京都東山安井神社金比羅宮会館。会員の外三名手協賛出演(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

三月二十六日(日)午後三時十分NHK・FM「湖水渡り」(二十八分)、盲僧琵琶演奏(二分)、演奏者中村旭園女史。

住居表示変更

小沢錦弥氏 八王寺市散田町二丁目二十四番三号

弘沢洲雨(雨水)氏

二月十五日逝去。享年七十八。故大館洲楓師の高弟で朗麗な演奏ぶりには定評があった。また作詞家としても有名で琵琶楽の発展に貢献された功績は大きい。謹んで御冥福を祈る。

予告

○梅原旭壽会演奏会 五月三日(日)正午京都東山松原上ル安井神社金比羅宮会館、後援京都琵琶協会。旭壽会員の外薩摩、錦心流、筑前各流派名曲数番演奏。

○大阪平野大念仏寺琵琶献奏会 五月三日(日)午後一時大阪琵琶同好会協賛(聖心大寺八百五十年祭)。

○大館洲楓七回忌追善琵琶演奏会 五月十八日(日)正午東京渋谷東邦生命ホール、主催洲楓会。会員二十一名による「敦盛」外八曲及び来賓十氏(友吉鶴心、押田旭翁、若水桜松、中谷襄水、山崎旭萃、前田秋声、藤巻旭鴻、遠藤鶴東、都錦穂、水藤五郎)の琵琶演奏並びに兩宮国風外四氏の朗詠、詩吟舞十六題。

○京都琵琶協会五月例会 五月二十四日(日)午後一時本部平井会長宅。

○第四回琵琶楽名流大会 五月三十一日(日)十時半-十六時京都烏丸丸上ル京都商工会議所三階大ホール、主催日本琵琶楽協会関西支部。各流派二十四曲演奏(有料)。

○琵琶楽名流演奏大会 六月十四日(日)正午東京日本橋証券会館、主催日本琵琶楽協会。

各流派二十四曲演奏(有料)。

○大阪堺大鳥神社奉納琵琶演奏会 六月十四日(日)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

おとぎ

高槻市の中央を縦貫する清流芥川堤防に咲く数十本の桜爛漫の好季もアツというまに過ぎて世は早くも青葉若葉のすがすがしい春月を迎える。●「花の命は短かくて苦しきことのみ多かりき」と林芙美子さんは云ったが「多かりき」を「長かりき」と云いかえる衝動にかられる。●桜花は一瞬のうちに散る、しかしその一輪を姿よく精いっぱい咲かせるためには二百日、三百日の長い準備期間が必要だといふことを私たちに教えてくれる。●即ち前年の花の散ったあとの六月ごろに花芽の分化が始まり、九月には雌しべ雄しべが出来て花を咲かせる用意にとりかかり、翌年四月にようやく美事を開花となる。●苦しきことのみ長かりき」の果てに花は一瞬の生を謳歌する(朝日新聞「天声人語」)●それでも桜花は毎年春に一度花を咲かせるので同じようには云えないが、琵琶をはじめ芸道修業の道は「長かりき」で、冗談半分の気持でやっていていつ迄たつてもモノにならず、一生を通じて「これで完成」という時日のないことを今更ながら痛感させられる。

昭和五十六年五月一日発行(非売品) 編集者 植村 稟 水 行所 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七二六(七三六)〇五一

琵琶 機関紙

京

絃

第三二三号 京絃社

井伊大老と

安政の大獄(二)



安政の大獄に犠牲となった人々、何れも惜しむべきである中に、特に惜しい人物が二人あった。それは過去幾百年の間に曾って現れなかった偉大な人物である。

二人とは誰か。一人は橋本景岳(通称左内)一人は吉田松陰(通称寅次郎)である。景岳は安政六年(一八五九)十月七日殺された時二十六歳。松陰は少し遅れて十月二十七日に斬られたが、年令は三十歳であった。二人とも若いのにその人物識見は抜群で、真に天才というべきであり、その教えは没後に於いて明治期の指針となつて来たのである。

景岳は天保五年福井に生まれ、十二歳の時藩の儒者吉田東篁に就いて学んだが、東篁は山崎闇斎、浅見綱斎の系統を受けて困体の尊厳を説いたので、その教えによって愛国の至誠と慷慨の気魄とは自然養われ、十二歳の少年ながら、深く宋の岳飛の人となり慕ひ、自ら景岳の号を名乗った(景は慕うという意

味)。そして十五歳で『啓発録』を著わした。それは、(一)雅心を去る、(二)振気、(三)立志、(四)勉学、(五)交友を擇ぶ、の五つの綱目を立てて、少年学に入る心得を書いたものだが、進んで他人に示すものではなく寧ろ自分の志を励ますもので、十年後の安政四年に之を発見した時、景岳自身も当時の奮励、却って今日の及ぶ所でない事を思い「嗚呼十年前既に彼の如く、而して今日此の如し、即ち今より十年の後それはた如何ぞや」と歎き、同門の学友はこれを見て「一言半句も忠孝節義の言にあらざるは無く、感慨激励の氣、勃々としてその間に流溢し、人をして悚然興起せしむ」と感歎した。今その「雅心を去る」の條から少し書き抜いてみよう。

雅心とは、おさな心といふ事にて、俗にいふわらべしき事也。(中略)十三、四にもなり学問を志し候上にて、此の心、毛ほとりても残りこれある時は、何事も上達致さ

ヤがて十八歳の冬、父の病氣によって故郷に帰り、翌年父の死に於いて後を継いで藩医となったが、二十一歳に江戸へ出て杉田成卿に入門。大阪の緒方、江戸の杉田は、当時蘭学界最高の権威で、江戸留学二年余の間に、天下の名士に会つてその精神を磨くことが出来たが、景岳が特に敬服したのは水戸の藤田東湖であった。景岳は東湖を通じて水戸学の感化影響を受けたのである。

安政二年の二十二歳、福井藩は景岳を医員から政務に当たらせる事にした。ヤがて景岳に大事を担当させるため安政三年四月、景岳を拔擢のため帰国を命じたが、景岳は「国是決定のため帰国せよとの命なるも、元来皇國は異邦と異なり革命という乱習悪風無く、神武天皇の御遺訓を守る外なし。忠義を重んじ、士武道を尚ぶ、この二個條は皇國の皇國たる所にて、支那や西洋と比較しその優劣は雲泥の相違あり、支那を慕い西洋を真似る必要無し。この大方針実現の爲ならば即日出發帰国

せん。

これが二十三歳の青年景岳の返答で、藩は是を諒承し、景岳を主任として教育の改革を断行した。越前では水戸の弘道館を模範として明道館を創立したが、景岳によって西洋の学問を取入れた事が明道館の特色となった。然るに時勢の切迫は、景岳の明道館に専念するを許さず、翌安政四年八月藩主松平慶永の内命で開国攘夷の問題と將軍の後嗣、即ち慶喜、家茂の選択、此の重大事のために朝廷幕府、諸藩の間に奔走することになった。その一年後の安政五年七月、藩主松平慶永は隠居謹慎、次いで景岳も閉居謹慎の身となり、翌年十月伝馬町の獄に下され、同月七日死刑に処せられたのである。時に二十六歳。



### 京都戦乱史

辻 旭 城

一千年の歴史をひも解いて  
千年の古都の歴史をひも解いてみると、戦乱・災害の多いことに驚かされる。そして、戦乱はだいたいの時代の流れの節目にもなっており、また新しいものと古いものとの交代期にもなった。  
文献によると小さなものを含めて、平安遷都から幕末まで二十数回の戦乱が記録されて

いる。その中で歴史的には、平安の後期から中世にかけて頻発している。簡単に説明すると、(1)保元の乱と平治の乱は、新しい時代の主役武士階級の台頭を告げる出来事といえる。(2)承久の乱は、朝廷が武士から政権を取戻そうとしたものであった。室町時代の末から江戸時代の初期にかけて群雄割拠時代には、天下統一の競争に全国の武士たちも加わった。幕末の動乱は新しい文明世界の黎明を知らせたものである。

戦乱は必ずしも破壊ばかりでなく、新しい時代を生み出す苦しみだったとも云える。しかし、不可解で無益な戦いもあった。

応仁の乱の起こった頃は、激しい土一揆に揺れ動いた時でもあった。貞観八年(八六六)藤原良房がはじめて摂政となり、次いでその子基経が関白となってから、藤原一族で朝廷の高位高官を占め、なかでも道長・頼通の頃が全盛であった。しかし律令制度は実質的に崩れ、栄枯盛衰の諺の如く藤原氏の権勢も次第に斜陽となるとともに、京の町々も荒れ果てて盗賊や浮浪人が多くなってきた。

こうした世相不安定の中で、東国を中心とする武士の興起によって藤原氏の摂関政治が崩れ去った後、まず政権を勝ちとったのは平氏である。平清盛は摂政となり、東山にほど近い五條から七條のあいだに六波羅第をひらき、藤原氏の文化・制度をうけついで武家政治を行なった。  
壇の浦合戦によって平家は亡び、源頼朝が

鎌倉に幕府をひらいて再び武家政治をはじめた。しかし京都には相変らず朝廷の院政によって政治の幾部分を保ち、学問や文化の中心になっていった。

鎌倉幕府のあとを承けた足利氏は京都室町に幕府を置き、京都は再び政治の中心となった。室町幕府はもとも守護大名に対する強い統制力を持たなかったが、初期には三管領・四職家の有力守護大名の補佐によって政権を支えられてきたが、室町中期頃から有力守護大名の対立や反乱に悩まされ、幕府の支配力は次第に衰えはじめた。加うるに幾多の失政から農民を圧迫する結果となり、徳成一揆・土一揆が頻発したが、幕府はこれを鎮圧する力もなく、一時凌ぎに借金を棒引きする徳成令を乱発して、経済を混乱するばかりだった。

中央政治が魔痺状態にあるなかで、八代將軍義政は風雅な生活にふけり、嗣子が無かったので僧籍の弟義親を還俗させて將軍の後継者に決めたが、翌年義尚が生まれたので継嗣争いが起った。

当時の守護大名のうち、細川勝元と山名宗全が幕府の主導権をめぐって対立したが、義尚の生母日野富子が山名に頼ったため、細川は義親を助けて対立に拍車をかけた。また、同じ頃幕府重臣斯波・畠山両家にも家督相続争いがあり、これも細川・山名両派に結びつき、天下二分の形勢となった。  
応仁元年(一四六七)一月、畠山政長・義

就の衝突が起り、京の上御霊社の森で激しい合戦となり、山名宗全は義就を助けて大勝利を得させ、一方政長が頼る細川勝元も大量の兵を挙げたので、応仁の乱は大乱に発展した。即ち細川方は十四ヶ国十六万の兵を以て室町の東に布陣し、山名方は二十ヶ国九万の兵を率いて西に陣を敷いた。東西両軍は京で攻防戦を繰返し、この戦で洛中、嵯峨、梅津、桂から西山、北山一帯の街々まで焼野原となり、文化財や貴重な古文書の大半を失った。しかし、文明五年(一四七三)山名宗全が死に、相ついで細川勝元も世を去ったため、さしもの戦乱もようやく下火となり、同九年に京都での大乱は一応終りを告げたのである。



### 琵琶歌中の 詩吟・和歌朗詠考(七)

編集部

#### (琵琶歌一乃木將軍)

爾靈山 乃木 希 典  
爾靈山險豈難攀 男子功名期克難  
鐵血覆山山形改 万人齊仰爾靈山  
爾靈山は険なれども豈(あに)攀(よ)づ  
る(に)難(かた)からんや 男子の功名  
克難(こなん)を期す 鐵血山を覆(お  
お)いて山形改まる 万人齊(ひと)し

#### く仰ぐ爾靈山

(作者は山口藩士、大正元年九月十三日明治天皇の崩御に殉死、齢六十四)有名な二〇三高地の戦いが激戦の極であつたかを偲ばせる。爾靈山二〇三高地で露軍の主要地 期克難(期)難(難)を征服する 覆山(山)山をくつがえしてと読む人があるが山をおおいてが正當。

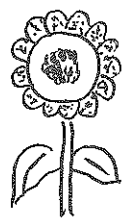
(大意) 二〇三即ち爾靈山の険は難攻不落といわれているが、攻め登れぬことはない、男子が勲功をあらわすには難難はあるが打破つてこそその功名で、兵士達の熱血によって山の形が変るかと思われた。世の人々は永遠に爾靈山を仰ぎ見て尊い英霊を弔りであらう。

#### (琵琶歌一川中島)

題不識庵擊磯山図 頼 山 陽  
鞭声肅々夜過河 曉見千兵擁大牙  
遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇  
鞭声肅々夜河を過(わた)る 曉に見る  
千兵の大牙(たいが)を擁するを 遺恨  
なり十年一劍を磨す 流星光底長蛇を逸  
(いつ)す。  
不識庵(し)上杉謙信の号 磯山(い)武田信玄の  
号、甲府城を磯山館と称す 大牙(お)大将旗、  
旗竿の頭に象牙を飾るために云う 長蛇(お)謙  
信にたとえる。  
(大意) 永祿四年十月、犀川の戦に信玄は  
謙信が他方から攻めて来ると思っていたところ、  
思いもかけず前方から騎馬姿で現れた。

### 五絃閑話

水 藤 五 朗



京絃三一六号掲載「孤軍奮闘……」の詩の作者西郷隆盛は西道仙説が正當、また日本詩吟学院の教程では作者不詳となつている。一読者さんから注意がありました。

琵琶楽白書(一)  
彈奏の実践者の数はどう多く見ても三千人を上回ることはないと云える。常識的な数は二千人数ではないだろうか。又、更に分析するのなら、我々の視覚に入っている人々は五

百人位であり、その中でも、常時活躍しているとなると半数以下に絞られてくる。

愛聴者についてはどうであろうか？ 琵琶と一口に云っても、その音楽性は多岐に亘っているが、それを考慮に入れて考えても一人は超えないのではないだろうか。雅楽に於ける楽琵琶や、平曲などを鑑賞する機会が、教育の教材としてしばしばある。が、これは愛聴者そのものの数を増やすことにはならない現実があり、愛聴者の主流はやはり薩摩、筑前等に代表される近代琵琶楽なのである。ただ、この近代琵琶楽での愛聴者について考えると、その大半は演奏実践者であると言え、現実がある。演奏会に来聴する多くの人は、つまり仲間の人々であった。永年のこの現象はついに改まることなく、琵琶界の退潮の第一の原因にもなっている。楽琵琶や平曲を多くの人々が見聞しながら、愛聴者は増えず、薩摩や筑前などの近代琵琶を愛聴する人はあっても、広く社会に知らせる場を持ち得ない、と云う二つの大きな問題を抱えているのが現状である。

現在、東京で開催される琵琶演奏会は、月に多くて五つ、少ない時は一つあるかないかである。勿論、茶話会とか、十名程の研究例会などは数多くあるのであろうが、大きな意味では、愛聴者人口の尺度にはならないのである。琵琶演奏者の大半が六十歳以上である今日では、この現状も止むを得ぬものであるかも知れない。NHKの「放送五十年史」に

よると、昭和十五年前後のラジオの番組聴取人口中、琵琶は二六%余りで、浪曲と共に上位を占めていたとある。そして四十年の後、月一度放送される琵琶演奏が琵琶放送の唯一のものであり、聴取率は〇、一%と云う。

琵琶人口についての現状分析は、それが推定の域を出ないとは云え、楽観の許されない所まで来ているのである。琵琶楽の大きな二つの現象、即ち、雅楽の琵琶や平曲などの如くに、多くの人々に接する機会や、歴史的普及性を持つ割に、現代、若しくは今後に生き残る可能性が乏しい。これに反して、近代琵琶の如く、かなりの数の演奏実践者と同時に、数十年前には相当の愛聴者を持ちながら、その活動の閉鎖性の故に、次第に演奏者と愛聴者を失なってしまった場合、これ等をどの様に解決するかである。

先ず当面の解決策は、近代琵琶楽を楽琵琶や平曲の如く、一般の人々に接する機会を多く持つものにするところである。ではその方法はどうであるかと言ふことになるが、それは、学校音楽に於いて、琵琶鑑賞の機会を増加させることであり、その為の社会的運動が琵琶人の総意としてなされる事である。 今日迄、琵琶鑑賞の主は平曲であった。確かに平曲は一時代を代表した芸能であり、その日本音楽史に於ける位置は極めて重要で、明治・大正期に於ける近代琵琶楽隆盛の事実

を遙かに凌ぐ意味を有しているものでもある。が、琵琶は平曲のみでなく、その命脈は近代琵琶楽にも流れていて、更に、明治・大正・昭和と、それなりの流行を近代琵琶は見たとある以上、もう少し広くその事実と存在を取り上げられていいのではないだろうか。明治の流行の一つに女流義太夫や、雲右衛門の浪曲が取り上げられることはあっても、琵琶の流行は一行の附言もされない事がある現実が、それらを執筆する有識者の間にさえも、知らされていぬ事になってしまっている。琵琶の現状の良し悪しは別として、近代琵琶楽の在りし日の実像を広く知らしめることが、先ず平曲と共に鑑賞教材の一つとなつて、新しい鑑賞者を得る近道ではないだろうか。

十年後の琵琶人口は、現在のままでは何等方策がとられないとするならば、予想乍らも漸次減少してゆき、二十年後は三分の一程になつてしまふ、演奏者は百名を割るのではないだろうか。平曲は、現在名古屋の井野川検校に代表される、いわゆる平曲人は皆無に近くなり、生(なま)の平曲演奏は、女性の演奏を除いては、聞かれなくなるかも知れない。薩摩正派も平曲の運命をたどりかねない危機がしのびよっている。又、大きな意味では琵琶全体、更には、語り物音楽の全てがこのような危機に直面しているのである。が、若し、いくつかの努力がなされ、加えて

若者の間で、最近学生層の極一部乍らも琵琶への人気があがっていると云う、小さな芽がそこに組み合わされるなら、明るい面も期待できるのである。

なにはともあれ、琵琶の存在と、それが衰亡の危機にあることを強く社会に主張することである。現在、多くの人は琵琶の何たるかも、明治・大正期と云う、ごく間近に興隆したことも知らないのが実際であり、それを知り得る明治・大正生れの人々は、日本人人口の二〇%を割っているのである。



「百人一首一夕話」より  
これやこの ゆくもかへるもわかれては  
しるもしらぬも あふさかのせき  
蟬丸

。作者父祖、経歴など不詳  
後撰集雑一、この歌の詞書から見て、  
琵琶の上手な無名世捨人だったと。

宇多天皇(五九代、八八七年)の御子式部卿敦実親王と申せしは、管絃の道を好みたまひ、ことにその芸に精しくおはしましぬ。中にも琵琶に妙なりければ、みづから流泉、啄木の曲を作らせたまひけれど、秘して人には

伝へたまはざりし。此の蟬丸は、かの親王の雅色なりけるがこれも琵琶を好みける故、親王の弾せたまふ流泉啄木の曲をいつともなく聞き覚えて遂にその手を弾き得られけり。

延喜五年(九〇五)の頃、逢坂の関のほとりに庵室を造りて住れけり。かくて時々琵琶を弾き樂まされけるが、平生もてあそぶ琵琶の名を無名とぞいひける。蟬丸隠遁の身となりて長生せられし故、老後に流泉啄木の曲を博雅三位には伝えられたり。

この三位は延喜帝の皇子、兼明親王の御子にて皇太后宮大夫從三位源博雅と申せし人なり。この博雅も、ことに琵琶の上手にておはしけるがまたわらわにてをさなかりける比より、木幡(こばた)といふ所に目つぶれたる法師の、よにあやしげなるもの有りてそれに琵琶を習はれけり。世に蟬丸を盲人なりと伝えたるは此の木幡の盲僧の事をひとつに混じたるあやまりなり。(鴨水記)

我が道を行く

六十五年(七六)



西郷 天 風

琵琶慰問・南方從軍始末記

折柄、堀毛砲連隊では、かねて計画中の涼山(ランソン)城総攻撃に出発を開始したので、報道班に属する私も琵琶を入れたケ

スを持つたまま参加することになった。

ドンタン駅を離れて南へ約二十キロ、仏印最北端の要塞ランソン城を一望のうちに収める小高い丘陵の重なり合う間に四ヶ所の砲列を敷いた野砲隊は、中央の森林内に監視哨統制点を設け、連隊長初め二、三の幕僚と共に私も其の席に在った。四ヶ所の監視哨からは各砲列の動作状況を刻々と電話報告があり、副官の取次ぎを受ける連隊長は一つ時なにか多忙だった。しかし私達がこの地点に来て程なく敵の応戦は静なくなり、やがて第一砲列陣から敵の沈黙報告があり、第二砲列陣からは新たにトーチカを発見したが、活動はしていない様子だと命令を仰ぐ様子であり、第四砲列の監視哨からは白旗のようなものが現われたといひ、次いで第三砲列の監視哨から夥だしい兵士が数台のトラックで城外へ集結しつゝある如く伝えて来た。そこへ第二監視哨から、明らかに白旗を振っていると云い、第三からトラックの兵は敵か味方か判断がつかねると報じて来た。私は此時第三砲列の監視哨が右手の山上といつても小高い丘の上程度の所だが、そこにあると聞いてその監視哨へ昇っていった。其処には一台の砲対鏡に一人の兵士が、かじりつくようにして覗きこんでいる。声をかけると驚いて目礼する。その眼は思いなしか血走っているようだった。間断なく砲対鏡にかじりついていては、いかに頭丈な眼でも疲れるであろう。私はちよつと見せて貰った。ところが丁度二、三名の兵

士が民家のような建物から出たかと思えば、又隣りの家に這入るその服装を、眼を据えて見れば、巻脚伴の風体がどうやら友軍に違いなかった。

「君、あれは友軍のようじゃないか。」と云えば、兵は直ちに電話で友軍らしいと訂正した。程なく堀毛大佐は単身昇って来て、砲対鏡を覗くや忽ち「あゝ友軍だ、友軍に違いない。お、あそこには白旗が見える。こりゃ軍使をたてねばならぬ。」と叫びながら、いそいそと元きた路を降っていった。

この連隊長の言動によって周辺が俄かに色めき立ち、兵士達がそこちの木蔭や岩陰から現われ、いづれも晴々とした眼差しに無言の顔を探るにやまらなかつた。

やがて国境のドンタンにある中村兵団司令部から、岡中佐が軍使となり、通訳に横山少佐を従えハイヤーを飛ばして来た。堀毛大佐は今迄の戦況経過や交渉の要諦を与え、私に記者代表として随行するよう命じられた。私は五味田連絡員を連れ、軍使一行に従って来た映画班のトラックに、之も堀毛大佐の口添えによって便乗することが出来た。

こうではないか、と足を早めて要塞内に堂々と乗り込んでいった。この要塞は洗面器を伏せたような地形の斜面に、三人宛の兵が壕の中に直列して機砲を構え、その後ろに仏将校が一人指揮を取ってある陣形が数ヶ所宛一列に並び、その上方五、六メートルほど間を置いて、同じような列を並べて階段をなし、各列の中間にトーチカが対戦車砲を据え我方に對していた。この物々しい陣形の中から仏蘭西將校が異様を面持ちて飛び出し、我が一行の前や両側につめ寄って何やら叫んでいる。一人の兵も姿を見せず、やがて四方から数名の將校があわただしく馳せ来り、後方からついて来た將校と集合して我が軍使に詰問の拳に出てきたが軍使はこれに應ぜず、司令官の居室に案内を迫り、遂に両軍使を残して横山通訳只一人、司令官の許へ行くのであった。

義士 萱野三平



志賀

「わたし、売られてゆくわいな……。歌舞伎芝居の早野勘平は、赤穂浪士萱野三平をモデルにしたものではあるまいかと考えられるが、若しそうだとしたらこれは実説とは大違いで、萱野三平は立派な人物であり、萱

野を冒瀆するも甚だしいと云わねばならぬ。元禄十四年、殿中松の廊下で浅野内匠頭長矩が、重なる恥辱に堪えきれず吉良上野介に刃傷したという報を、赤穂の城代家老大石内蔵助に、夜を日についで逸早く知らせたのは早水藤左衛門と萱野三平の二人で、その後早水は他の同志たちと共に吉良邸に討入って首尾よく亡君の仇を報じたが、萱野は事こころざしに反し悲運な脱落者として、四十七士の中に加わることが出来なかつた。

赤穂には二百七十余人の士分が居たが、大石と行動を共にすると誓約したのは六十一人に過ぎず、無論萱野も血判して義烈の態度を明らかにし、江戸に居る浪士の仲間入りをするようとするのであるが、吉良と縁続きの大島出羽守に仕える父はこれを許さず、親子の縁を切つてもという三平の願いも聞き入れて貰えないので、遂に進退きわまって忠と孝の二道を全うするため切腹して相果てた。

十三才で浅野家に仕官し、主君長矩の近衆として将来を大いに囑目されていたが、元禄十五年一月十四日、月こそ違うが亡君の命日に、二十八才を一期として短かい生命を絶つたのである。「晴れゆくや日ごろ心の花曇り」は辞世の句。三平は俳諧にも深い嗜みを持ち、号を清泉と称した。

討入りの後大石は「萱野三平が存命していたら屹度一味に加わっていたるうちに残念であつた。」と語つて居り、討入りの時には三平の戒名を懐中に入れていたというから、大石

は萱野の志の深さを充分認めていたのである。萱野家は旧萱野村(現大阪府箕面市芝)一帯の領主で代々勢力を保ち、その屋敷跡は、「義士萱野三平邸跡」として府の史蹟指定を受けている。



柴田旭堂女史母娘共演

神戸ポトアイランド博覧会に

神戸港沖の一角に十五年の歳月と五千三百億円の巨費を投じてこのほど完成した新しい「海の文化都市」神戸ポトアイランド博覧会の開会式が、前日の三月十九日皇太子殿下御夫妻をお迎えして国際広場で盛大に挙行され、式典に続いて各種の催しが華々しく展開されたが、その中で宝塚劇団四十四人のコーラス、また柴田旭堂女史が「平清盛経ヶ島」を演奏のほか、上原まり(柴田旭堂)嬢が宝塚を代表して竹中郁氏作「神戸の歴史と未来の栄光」をソプラノで、母堂旭堂女史が琵琶で同じ舞台に於てこれと共演して、皇太子殿下をはじめ二千五百人の参列者から新規観客のこころみとして注目を集めた。この実況はNHKや朝日、毎日、近畿、サン等各テレビで現地から同時放映された。尚柴田女史は開会

日の二十日から二十三日まで毎日出演(土、日は二回)して好評を博した。因みに同博覧会は三月二十日から百八十八日間開かれ九千三百万人の入場が予定されている。

日本芸術琵琶普絃会三月例会

三月十五日(日)昼一時東京文京区大塚六丁目貸席京屋。お江戸日本橋・門琵琶・伴流謡切第六弾法一山崎錦幽▼本能寺一内田隆章▼漢詩二題一奈佐喜八▼俊寛(上)一坂入晴峰▼湖水乗切一福島脹水▼別れの盃一佐藤旭尚▼吹雪の敵一山比錦岬▼山伏接待一高田栄水▼城山一山比稲子▼設楽ヶ原一青木早水▼弾法崩れの数々一鈴木流泉。以上研修を終り小宴の後五時散会。

若水流吟詠大会

三月二十九日(日)朝九時四十分東京中野区中野公会堂、主催吟詠若水会(会長若水桜松氏)、後援クラウンレコード株式会社ほか。会員及び来賓の吟詠詩舞百四十九題の外茶道吟桜狩一琵琶二十三人・茶道樋渡社中▼出陣学徒の靈に捧ぐ一琵琶三人・吟四人・朗詠四人・ナレーター一人▼詩舞千鳥一琵琶若水桜松・吟三人・舞踊一人▼剣舞城山一琵琶二人・吟若水桜松・剣士一人▼剣舞白虎隊一琵琶二人・吟二人・剣士松井社中▼詩舞俊寛一琵琶と吟

野を冒瀆するも甚だしいと云わねばならぬ。元禄十四年、殿中松の廊下で浅野内匠頭長矩が、重なる恥辱に堪えきれず吉良上野介に刃傷したという報を、赤穂の城代家老大石内蔵助に、夜を日についで逸早く知らせたのは早水藤左衛門と萱野三平の二人で、その後早水は他の同志たちと共に吉良邸に討入って首尾よく亡君の仇を報じたが、萱野は事こころざしに反し悲運な脱落者として、四十七士の中に加わることが出来なかつた。

日本琵琶悠絃会三月例会

三月二十九日(日)昼一時東京中野区大和町地域センター。門琵琶外弾法一山崎錦幽▼菅公一八束一峰▼詩吟千鳥一天羽岳水▼湖水乗切一金尾洲丈▼風雲児一中村洲心▼菅公一大富士岳鮮▼桜狩一篠宮榎水▼彰義隊一清水源城▼錦の御旗一鈴木鶴福▼恩讐の彼方へ一長谷川錦舟。五時半散会。当日来賓仲川秀邦女史。

琵琶と詩吟の演奏会

四月五日(日)正午東京品川区西五反田五丁目氷川神社参集殿、主催秋声会本部(会長前田秋声氏)、後援琵琶芸術協会ほか。紅葉狩一土山、若森、小沢・絃秋香、秋楓、秋翠▼母常盤一鬼頭▼菅公一白井▼月下の陣一若森▼忠度一田端▼城山一宮原▼竜の口御難一松吉▼天野屋利兵衛一岸本港水▼壇の浦一今井旭柳、若林旭洋▼安達ヶ原一西川磯水▼最涯のツガ桜一土橋秋園▼白虎隊一若森▼桜狩一鬼頭、近藤、水野・絃秋香、秋楓、秋翠▼菅公一小沢▼会津の稚児桜一山本秋香▼湖水乗切一長谷川秋楓▼西郷隆盛一牧秋静▼川中島一松浦秋翠▼那須与市一阿部秋子▼石重丸一会主前田秋声▼(以下来賓)俊寛一荒川洲帆▼茨木一都錦穂▼須磨の春一輝錦凌▼羅生門一三上旭鳳、石川旭良、藤内旭須美・絃(特別出演)押田旭窮▼常陸丸一仲川秀邦▼天目山一宮原麗水。外に詩吟六題。